



東北大震災発生！！

2011.3.11.

芦花公園しあわせの野音の会

「防潮堤を乗り越え、市街地を襲う黒い波」岩手日報

私たちに何か出来ることはないのか？

1. 芦花公園を中心に音楽活動を行っている「芦花公園しあわせの野音の会」の声掛けで、仲間たちの間で支援の話が持ち上がりました。
2. 被災された方々に、ほんのひとときでもいいから楽しい時を過ごしてもらいたいという思いから、音楽とお笑いを楽しんでもらいたい。
3. 2012年1月14日～15日、宮城県亶理郡亶理町中央工業団地の仮設住宅を訪れることになった。



震災以来、初めてこんなに笑ったと喜んでくれた。



8世帯×31棟＝248世帯の応急仮設住宅

初回の訪問

2012年1月14日

参加者 亶理町住民 100名余り / 世田谷区民 29名

仮設住宅にはコミュニティがない？



集会室に入りきれないほどの方が集まってくれました。

イベント終了後の交流会で見たこと。

「2011年7月に入居後、集会室でこういうイベントは初めてだ」

「震災以来こんなに笑ったのは初めてだ」

「集会室に、こんなに人が集まったのは初めてだ」と言われた

隣の人がどういう人かも、よく知らない。

男性の参加が少ない。

お年寄りが多い（若者が少ない、子どもが少ない）。

**子どもも楽しく、男性も参加しやすい、
緑日のようなものができるだろうか？**



住民を引きつけてくれた「めおと楽団ジギジキ」さん。



震災以来、初めてこんなに笑ったと喜んでくれた。

翌日は、震災後 10 ヶ月の現地視察をしました。(2012.1.15.)



被害にあった車の山。



片づけをしている人たち。



破壊された住宅。



破壊された堤防。

ファンドの助成を受け、どこでも縁日を開催、第1回。

2012年5月4日 参加者 亶理町住民 80名余り／世田谷区民 48名



子どもコーナーでは、ヨーヨーやスーパーボールを実施。
この日より、小学生・中学生・高校生も参加するようになった。



手作りを楽しむ子どもたち。



ステージでは、歌やものまね、コーラスなど。



観客のみなさん。

ファンドの助成を受け、どこでも縁日を開催、第1回。

2012年5月4日



伊達政宗の人形を使った腹話術。



焼き鳥、やきそば、シューマイ、飲み物などを販売。



足湯の方に手のマッサージをしました。



マッサージ。



世田谷から参加したスタッフ。

反省点…一部の住民から苦情が…。

ほとんどの方からは歓迎されたが、我々の配慮が足りなかったのかも…。

- 支援慣れ(?)して、無料提供があたり前だったところに、有料への抵抗があった。住民の方からは、無料もそろそろ終わりにすべきだとの意見もあった。
- 居住区内に隣接する集会室のため、騒音(音楽)への苦情があった。
- 花火に対する苦情があった。(駐車中の車に落ちるのではないか?)

※ほとんどの方は喜んでくださったのだが、イベント終了後に直接ではなく、管理人に苦情が入ったことが後日判明した。



子どもの日にあわせて鯉のぼりを飾った。



室内では音楽も披露。

改善点。

事前の打ち合わせを綿密にする。

- 亘理町の行政・集会室の管理人・仮設住宅の住民と、事前会議を設け、。あちらの欲していることと、我々のできることの擦り合わせをしっかりとやりました。
- 音楽など音の出るものは屋内に限定。
- 酒類の販売を止める。など



最後に小さいですが、花火を…。



イベントの打ち合わせ打ち合わせを、現地に出向き、行政、管理人、住民とで事前に行いました。

難しさを実感、課題も。

地域性や痛みを知ること。

- 年に数回しか訪れることのできない私たちにできることは何だろう?
- お年寄りの多いこの仮設住宅が求めているものは何だろう?

これらはスタッフの大きな課題だった。

翌日は、再び、現地視察をしました。(2012.5.5.)



瓦礫の山は未だ膨大だ。



現地に立ってみると、誰かの物であった物が散乱。



小学校の体育館。



かろうじて形のある家も手つかずのまま。

ファンドの助成を受け、どこでも縁日を開催、第2回。

2012年7月28日 参加者 亶理町住民 50名余り/世田谷区民 34名



好評だった足湯とマッサージは継続しました（2回目）。



参加した方の、希望者に写真とちょっとした情報を掲示した。



室内で音楽を披露。



観客の皆さん。

ファンドの助成を受け、どこでも縁日を開催、第2回。

2012年7月28日



飲食コーナーは縮小して行った。

反省点

- 事前の告知に問題はなかったか？
- 魅力ある企画だったか？
- 現地の協力者をどう見つけるか？

参加者が少なかった。

日程がまずかったのか、目玉がなかったのか…。
4回目に向けて、企画を検討した。

100年かけて、おらほの森を作ろう！
防潮林再生の取り組み。



亘理グリーンベルトプロジェクト／ワークショップに有志が参加した。今後もできる限り、応援したい。

翌日は、恒例の現地視察をしました。(2012.7.29.)



山元町中浜小学校内部。



山元町中浜小学校体育館。



福島県相馬市松川浦漁港。



湾を逆流した津波の被害にあった住宅（松川浦にて）。

ファンドの助成を受け、どこでも縁日を開催、第3回。

2013年1月13日 参加者 亶理町住民 90名余り/世田谷区民 26名



一緒に体操をしましょう！



「ちょこっと体操」を一緒にやりました。



スタッフの母の踊り。彼女が宮城県亶理町出身だったことが亶理町に支援に行く「きっかけ」となった。



「皆さん、一緒に歌いましょう！」

ファンドの助成を受け、どこでも縁日を開催、第3回。

2013年1月13日



大勢の方が集まってくれました。



「めおと楽団ジキジキ」さんに大笑いの皆さん。



イベント終了後の交流会にも大勢残ってくれました。



回を重ねるごとに知り合いも増え、会話も弾みます。

翌日は、山元町のテラセンにお話とご奉仕をしました。(2013.1.14.)



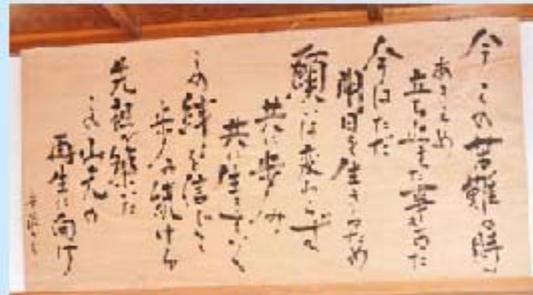
圓通山普門寺。



テラセンの藤本さんに当時の状況や現状のお話を聞く。



窓ふきや本堂のお掃除をお手伝いした。



掛けてあった書はありあわせの板に書かれていた。



明日取り壊されるという山下駅に献花台が設置されていた。

大雪のため帰れず、私たちが帰宅難民を経験 (2013.1.15.~16.)



1月15日、私たちは東京へ帰る予定でした。しかし、大雪のために高速道路がことごとく閉鎖、通行止めとなった。

中学生や仕事を持つ者にとって、まさに**非常事態発生**だ。まず、情報が少なく状況を把握できなかった。高速道路の電光掲示板も「通行止め」だけで、開通する見込みがあるのかないのか、全く役に立たない。どのルートなら行けるのか、どこが通れないのか…。

皆で、携帯電話、パソコン、ナビと必死で帰路を探すものの、明確な答えが出ない。

そうこうするうちに、携帯電話をはじめとする電子機器のバッテリーが切れた…。

結局、私達はマイクロバスの中で一夜を過ごし、翌日の夕方にやっと東京へ帰ることができた。

この事業の最後の回で、このような危機感を味わったことは、感慨深いものがあった。

総括

2012年1月の初回訪問から合計4回のイベントを宮城県亶理郡亶理町で開催し、亶理町住民300人以上、世田谷からは137名の区民が参加した。その中には、小学生、中学生、高校生、視覚障害者、84歳の高齢者までが含まれる。新聞やテレビでは実感できないものが、各々の心に強く残った。

成果

- 現地を訪れたことで、被災状況や復興状況、ボランティアの活動状況などを、視察&ヒアリングできた。
- 仮設住宅の状況（間取りや建物の状況、仮設住宅での自治の状況、暮らしぶりの状況）が見れた。
- 参加者の間でのつながりが拡がり、新たな被災地支援のアイデアが生まれてきた。
- 世田谷区が被災した時を想定して、どうなるのか？

何をしなければならないか、何を準備したらいいのか、何が必要かを考える機会が得られた。



中学生レポート
岡本飛夏



世田谷区から視覚障害者や高齢者も参加。



小学生・中学生・高校生・大学生も支援に参加。



毎回手作りクッキーの支援があった。

まとめ

私たちは、阪神淡路大震災、中越大震災、東日本大震災と現地に赴いてきた。そして、私たちなりに、この世田谷で大地震が起きた時にはどうしたら良いのかを考えてきました。

有事の場合の対処の結論は一つではありません。情報を正確に判断し、どう行動したら良いか、どう対処したらいいか、どう協力し合えるのかは、答えは一つではないし、正解も誤答もないと思います。

ヒアリングから…。

●ボランティアを受け入れる体制づくりや、状況判断が難しい。

ある地域では、早期からボランティアを受け入れたが、ある地域では、二次災害を恐れて、ボランティア立ち入り禁止区域に指定したため、住民が大変苦勞した。

→結果論であって、判断は難しい。

●ある避難所で支援物資が配布されなかった。

200人が避難していた避難所に、おにぎり100個、アンパン100個が支給された。しかし、人数が200人のために、平等に配れないという理由で、その時に食料を必要としていた人々がいたのに、配布されることはなかった。後にそのことを知った住民は、非常に残念だと思った。

→建前や体裁ではなく、何が必要なのか、情報を皆で共有して、話し合える場づくりが必要。



課題：仮設住宅支援の経験から

住民の意向をまとめる体制がないと
外部から支援をするのは難しい

体制が壊れてしまった所ほど支援が必要
なのに、支援が受けにくく困っている

課題：ヒアリングから

- 避難直後の食べ物が無い頃、避難者の数分はないが、食べものが支給されていた。

例) 避難者200人、あんぱん100個、おにぎり100個

- 平等に配れないという理由で、配られなかった。
- 「知っていれば、現場にいた市民で必要な人から配ることができたはず、今でも残念」とのお話を聴きました。

世田谷への提言：考え方

どんな状況でも
どんなに短期間でも、
住民の意向をまとめる
《しくみ(体制)》が必要

地域ネットワークが一番大事！

すでにあるネットワーク

芦花公園花の丘フェスタ



今から備える防災教室
スタンプラリー



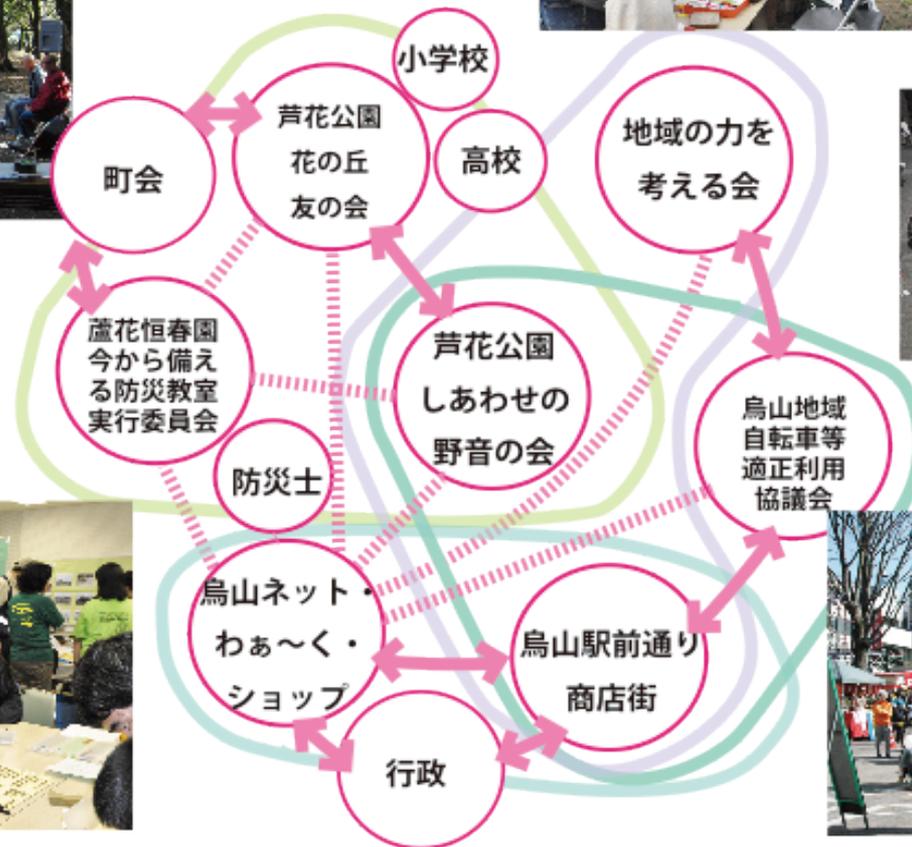
青空ワークショップ



ユニバーサルデザイン体験隊
スタンプラリー



自転車マナーアップイベント



世田谷への提言

1. 人任せにしない意識づくり
2. 新しい人と仲良くなる方法
3. 地域財産との連携（地域ネットワーク強化）
4. 都市間ネットワークづくり

人任せ(お客さん)にしない意識づくり

●●意識を変えるコトバを考える

●モットー：標語●

- みんな被災者。だれかがやってくれるわけではない。
- **気がついた人が呼びかけて行動するしかない**ことを伝える。

●呼びかけのコトバ●

- 中心メンバーだけでなく、**全員が役割をもち行動できる**ような呼びかけの**コトバ**を考える。

例)「これお願いできますか？ あなたが頼り」

「あなたなら大丈夫」「〇〇さんが喜んでいた」など

新しい人と仲良くなる方法

- ● **足湯** ・マンツーマンのゆったりタイムが、人の心をほぐします
- ● **笑い** ・笑ったあとは口もなめらか 話もはずみます
- ● **体験を共有** ・歌う/笑う ・お茶/食事 ・一緒に作業
- ● **繰り返し会う** ・会うたびに仲良くなる
- ● **名前をよぶ** ・名札は大切



地域財産との連携 地域ネットワークの強化

まだまだ連携できていない先があります

- 町会 ・地域を面的に把握している組織
- 小中学校 ・避難所の拠点 地域ネットワークもある
- 商店街 ・地域にいる大人 機動力がある

都市間ネットワークづくり

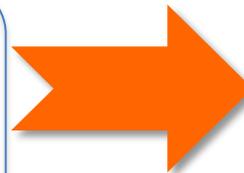
大震災時は、エリア一帯が被災地
遠い地域のネットワークがないと、支援はできない

- 親戚がいるように思い、東北支援
- 遠い場所への活動が、
いざという時、世田谷に役立つ

●● 避難所運営訓練に参加

- ・学校単位で行っている、避難所運営訓練への参加の機会を模索。
- ・学校や町会関係者と、あまり関係がない人達がであう場づくり。
- ・時間の経過により必要なことは違う。それを認識して検討。

既存活動に
「新たな人々が参加できる」
活動にできないか



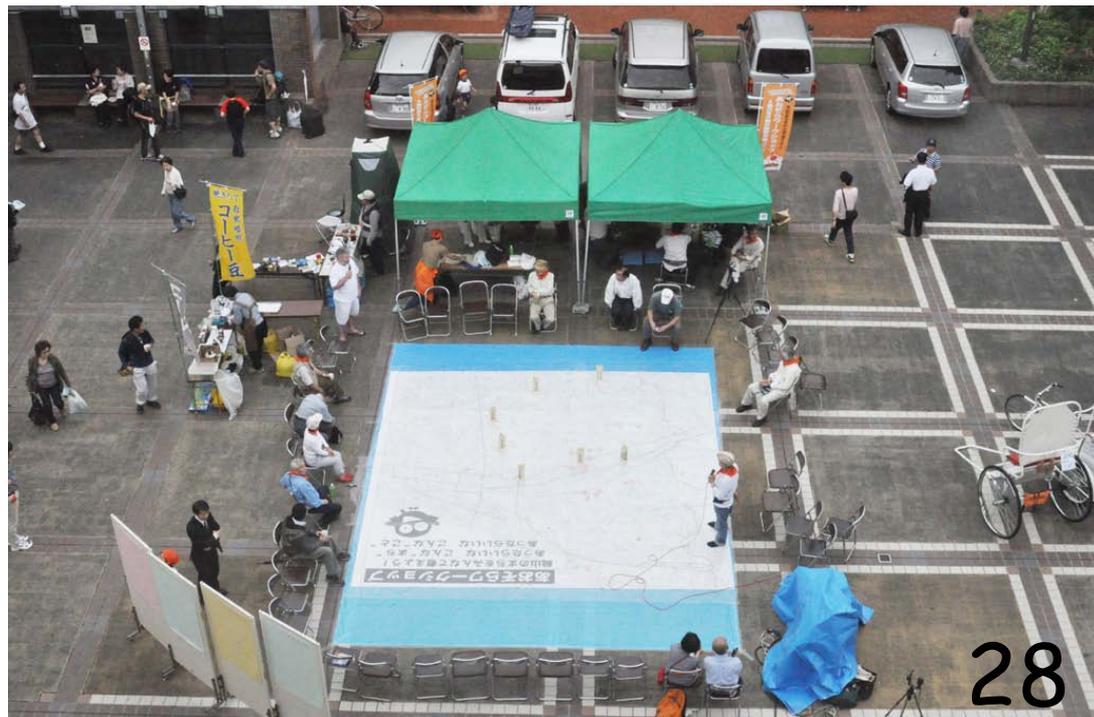
避難所である体育館に集合



医師によるトリアージの実践

●●青空ワークショップで実施

- ・「まちの課題とまちを良くする方法を、広くみんなで考えたい」と立ち上がった活動。
- ・これまでのコミュニティづくりに
「人任せにしない」「新しい人と仲良く」「地域ネットワーク強化」視点を入れて実施



青空ワークショップ風景



自分たちのまちは自分たちで守る！